



虹のかけ橋

第36号/平成25年 9月

兵庫県立 但馬やまびこの郷

<http://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/>

環境面の配慮と社会性の育成



但馬やまびこの郷には、相手の気持ちを理解しにくい子、集中力がない子、気持ちの切り替えができない子、思ったらすぐ口に出してしまう子、ネガティブな発言しかしない子、自分の思いが言えない子、騒がしい雰囲気苦手な子など、いろいろな子どもたちがやっています。

こうした子どもたちへの支援として、やまびこの郷では「困り感」を取り除いたり軽減したりする「環境面の配慮」と、自らの特性と上手につきあう「社会性の育成」が大切だと考えています。



① 環境面の配慮



まずは、すべての子どもたちがやまびこの郷を楽しんで、スムーズに活動できるように配慮をします。活動の見通しが持てないと不安感が高まってしまう子どもには活動のゴールを目で見て確認させる。ざわざわした雰囲気の中では集中できない子に、大切なことを伝える時には1対1で話をする。うまく友人に思いを伝えられない子には、話の仲介に入ったり、気持ちを代弁したりする。個人の特性上難しい活動は無理をさせずに本人に合う活動を考えるなど、本人が努力で補えない部分には十分な配慮を行います。

② 社会性の育成

しかし、配慮だけでは苦手なことへの対処方法を学ぶ場面を失ってしまうとも考えられます。本人は能力を持っているのに、その能力の発揮の仕方が分からないという子どもたちも多いです。社会性やコミュニケーションに課題を抱えているなら、苦手な理由を一緒に考え「こうすればうまくいくよ」というヒントを与えるようにしています。努力や座学だけでは、社会性やコミュニケーション能力は身につけません。ヒントを基にして、人と関わりながら試行錯誤を繰り返し、将来に向けて成長してくれたいと願っています。



人は 人の中で 人となる

発達障害と問題行動（問題提起編）

大阪大学大学院、大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学

連合小児発達学研究所 特任講師 和久田 学

はじめに

文部科学省の平成24年の調査によると、「通常学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒」は、6.5%でした。平成14年に行われた同様の調査では、6.3%ですので、表面上、発達障害の可能性のある児童生徒は微増に留まっているように見えるかもしれませんが、同じく文部科学省の調査によると、特別支援学級の在籍者数は、平成14年に81,827人だったのに対し平成24年では155,255人と倍増、特別支援学校の在籍者数(知的)も平成14年に61,243人だったのに対し、平成24年では111,468人とこちらも大きく増加しています。

こうした状況を考えると、通常学級にこれまで在籍していた発達障害児が何らかの理由によって特別支援学級等に籍を移動しているという現状と、それでも発達障害の疑いのある児童生徒が微増しているという実情が露わになってくると言えます。



1 発達障害と問題行動

文部科学省の調査結果を取り上げるまでもなく、今や、発達障害児のいない学級は存在しません。そして、発達障害児の問題行動(例えば暴言暴力や授業妨害)についても、大きな課題となっています。例えば、文部科学省が平成22年に行った暴力行為のない学校づくり研究会の第2回議事録を見ると、再三再四、発達障害児の暴力への対応策について討論がされていますし、学校内の暴力行為が平成14年で33,765件だったものが、平成23年で55,899件とこちらも大きく増加しており、特に小学校段階で、平成14年で1,393件だったものが平成23年で7,175件と約5倍になっているほどです。

とはいうものの、発達障害児の全てが問題行動を起こすわけではありません。

学級内の問題行動を特別支援教育の観点からみた場合、その多くが発達障害の二次障害(※)として捉えられるものであり、適切な対応によって改善する可能性がある(渥美ら、2006)とされています。



これは教育の可能性を示唆している一方で、発達障害児への不適切な対応や放置が、場合によっては、不登校、ひきこもり、精神神経的症状(無気力・抑鬱・統合失調症様状態・解離性障害・強迫性障害)、いじめ、虐待、暴力的噴出、非行、行為障害・触法行為などを含んだ「不応問題」を引き起こす可能性がある(高橋、2008)という厳しい指摘でもあります。

2 問題行動への対応の現状

私たちは、子どもの問題行動に直面したとき、どのような対応をしているのでしょうか？
典型例を掲げるならば、次のようになるかもしれません。

- ① 発達障害が疑われる児童生徒が、立ち歩き、甘えといった問題行動を起こす。
- ② 授業が成立しにくい雰囲気になり、いわゆる「普通」の子どもたちが影響を受ける。
(引きずられて同じような行動をする子ども、逆におびえる子どもなど)
- ③ 保護者と学校の関係が悪化。教員の精神衛生の悪化。
- ④ 学級崩壊。多くの子どもが二次的な問題を起こす。

2010年の全国連合小学校長会の調査は、こうした状況を裏付けています。発達障害児の指導で困っていること(複数回答)として、「友達とのトラブルが絶えない」と回答した学校が全体の69%、「その児童の行動が原因となり指導が困難」が59%となっている他、「自傷行為や他の児童への危害が心配で目が離せない」との回答も22%であり、「発達障害のある子ども自身への指導よりも、その子どもが在籍することによる影響」を懸念する声が強まっていると言えるでしょう(斉藤、2011)。

一方、学校現場の対応は迷走しています。教育委員会に支援員の派遣を要請し、個別の支援を始める場合もあります。空き時間の教員が応援に入り、何とか毎日を過ごしているという学校もあります。

3 問題行動を予防する

現在、学校における問題行動への対応は、問題が深刻化してから対応するという、「付け焼き刃的」な支援になりがちです。

本来、発達障害児の全てが問題行動を起こすわけではありません。むしろ、学校における不適切な対応が問題行動を引き起こしていると考えべきでしょう。つまり、学校現場の対応によって、状況が改善される可能性を示しています。

事実、アメリカでは、子どもの暴言暴力が1990年代に社会問題化し、結果として、応用行動分析を中心とした科学的根拠のある支援、特に問題行動を予防するという観点を重視したプログラムが導入されたという経緯があります。

このプログラム、Positive Behavioral Intervention and Supports(PBIS:Sugai et al,1999)では、子どもの行動を抑制する代わりに、好ましい行動を教えることを重視します。二次障害への後始末的対応ではなく、その予防として必要なスキルを獲得させるという方法を取ります。ルール違反を叱って指導することよりも、ルールを「期待される行動」として、ほめて獲得させるという戦略です。全ての子どもを対象とするユニバーサルな考えでもあります。

これをそのまま日本の教育現場に導入することは難しいですが、同様の困難さを抱えている私たちとしては、その基本的な考え方について、真摯に学ばなければならない時期に来ているといえるでしょう。

※ 二次障害

本人がもともと持っている障害について、適切な対応がなされないために起こってしまう、本来持っている困難さとは別の、二次的な情緒や行動の問題

次号は、「発達障害と問題行動～戦略的支援編～」として、問題行動の捉え方と予防的支援について扱います。



研修会より

やまびこの郷公開講座

5月27日(月)に「やまびこの郷公開講座」を実施し、東京家政大学の相馬誠一教授に「不登校支援の実際と予防について」と題してお話をいただきました。

① 不登校の現状と課題

不登校の出現率はずっと高止まりの状態。きっかけは実感として8割ぐらゐが友人関係のトラブル。不登校は、その後、通常の生活ができていれば問題視する必要はない。しかし、日本は引きこもりの出現率が異常に高いし、不登校の子が高等学校で進路変更する例も多い。基本的生活習慣、経済的自立、人づきあい、自信の獲得、将来の希望等に課題を抱える生徒が多く、社会的自立の阻害要因となっている。

② 学校での取組と予防

校内連携で不登校を出さない努力が必要。早期対応を心がけ、不登校児童生徒が多い場合は校内適応教室を設置し教員を配置すべきである。訪問支援を強化し、小中高連携も一層進めなければならない。教職員の役割は「学力の保障」「社会性の育成」「不登校の予防」。学校でできることは学校ですることが大切である。アメリカでは、すべての子どもが学業で成功するように支援する法律がある。フィンランドではできるようになるまで学べるシステムがある。明日の日本・世界の担い手を育てる意識で頑張してほしい。



不登校に関する研修会（第1回、第2回）

8月6日(火)と8月8日(木)に、不登校に関する研修会を実施し、神戸大学の吉田圭吾教授に「不登校児童生徒及び保護者の心理とカウンセリング」と題してお話をいただきました。

① 子どもとの関係作り

思春期型不登校は「心の窓」を共有して関係を作ることがポイント。心の窓というのは子どもが関心を持っている世界で、思春期は誰でも精神的に引きこもり自分の世界をつくるもの。その話を共有すると子どもが元気になり、先生との関係が深まる。「何で学校に来れへんのや」には黙ってしまう子どもも、心の窓を通してならいくらでも話をしてくれる。

② 保護者面談の極意

客観的に見ると保護者にできていないことが多いかも知れないが、目の前にいる保護者がこれまでずっと最善手を取り続けてこられたのだということ、肝に銘ずることが大切。「不登校の原因は親ではない」と伝えられるか。学校の先生は指導が専門だが、親面接では指導と共感のバランスを大切にしないといけない。



やまびこの郷ブログ

なかさんEye

今年の1月から始まったやまびこの郷のブログですが、4月から「なかさんEye」としてリニューアルし、なかさんこと中嶋副所長が子どもたちの活動の様子や研修会の様子などをタイムリーに発信しています。利用者の保護者からも子どもたちの様子がよく分かって好評です。日々の活動の様子を見ていただくと、やまびこの郷がもっと身近に感じて頂けると思います。先生方ぜひご覧ください。

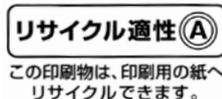


兵庫県立但馬やまびこの郷機関紙「虹のかけ橋」No.36 ●平成25年9月

●発行 / 兵庫県立但馬やまびこの郷

●〒669-5135 朝来市山東町森字向山45-101 TEL(079)676-4724 FAX(079)676-4721

●URL <http://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp>



25教①2-001A4